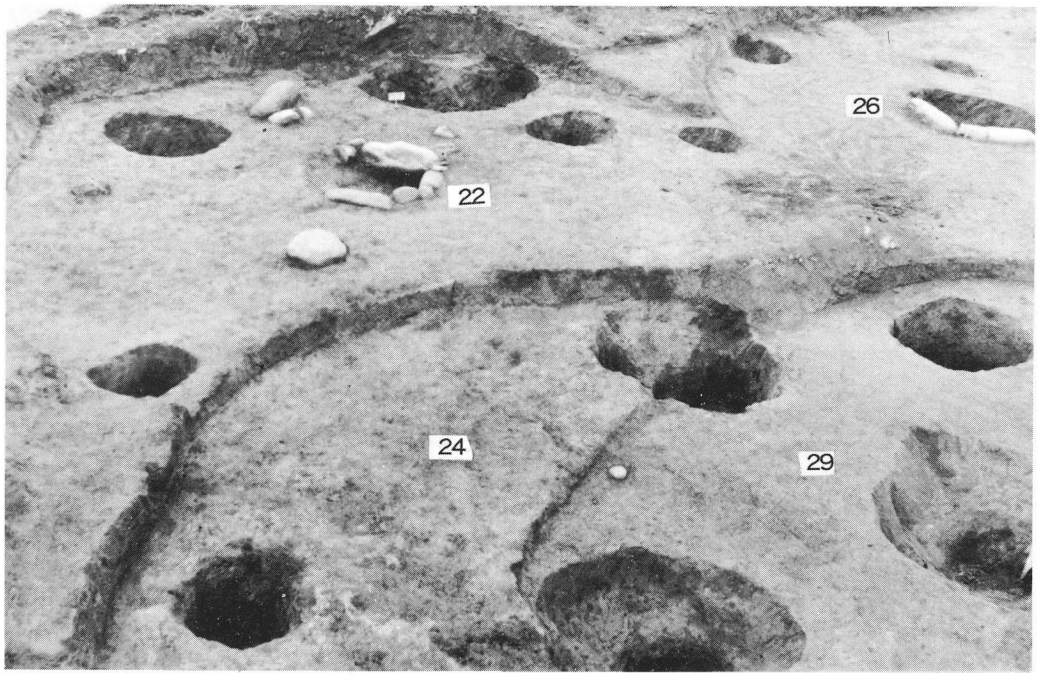
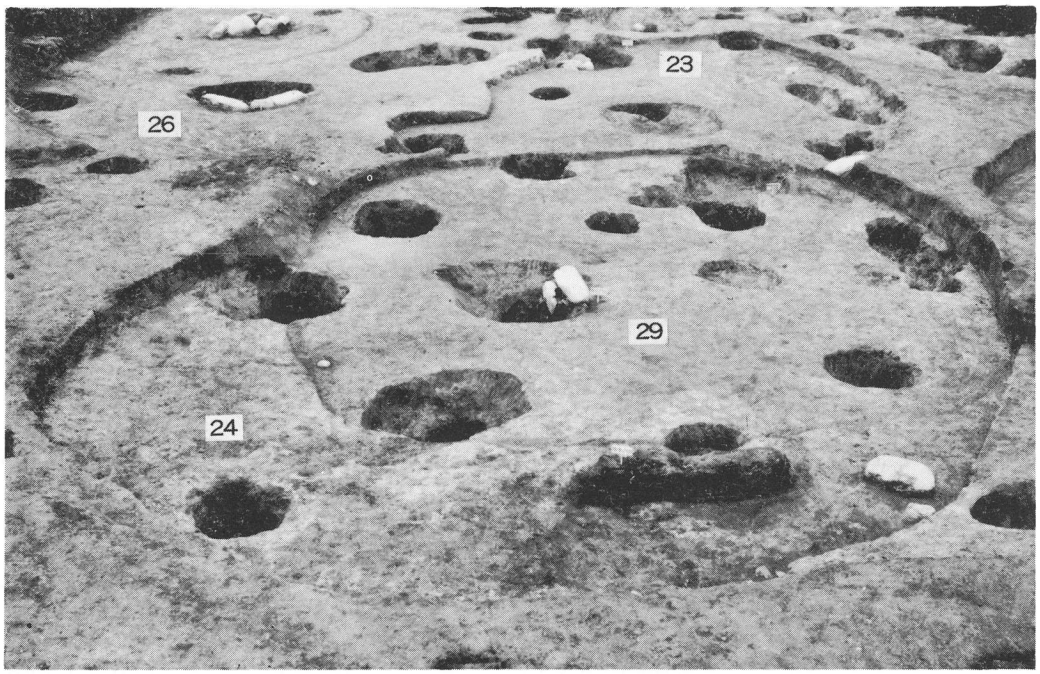
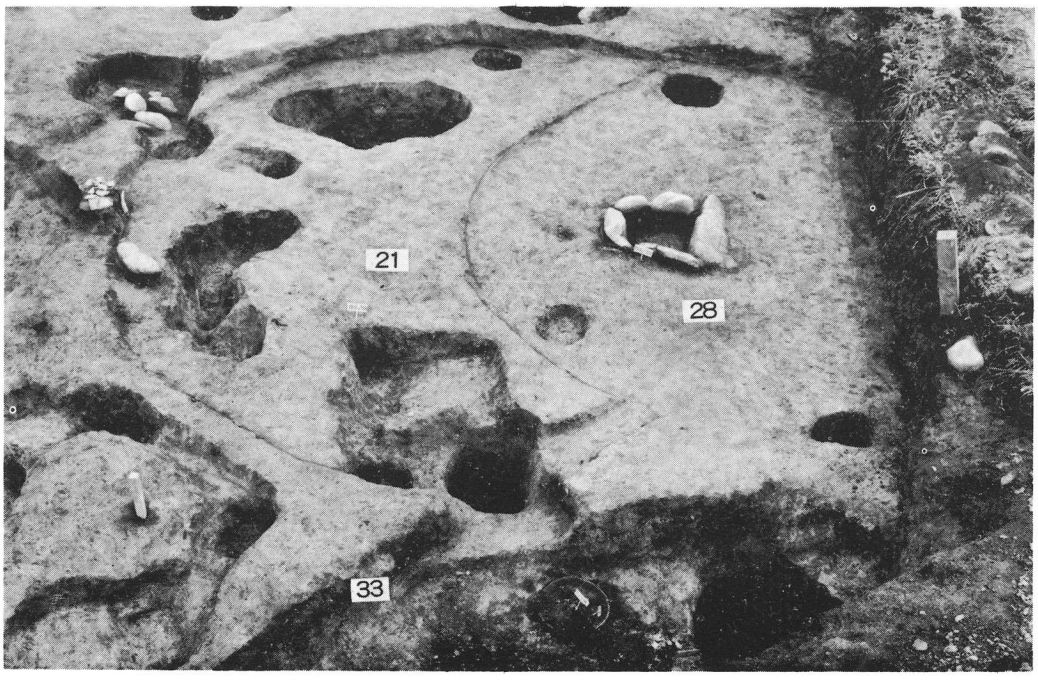
図版９　第17号(上)，第18・20号(下)住居址

図版10　第19号(上)，第22・24・26・29号(下)住居址

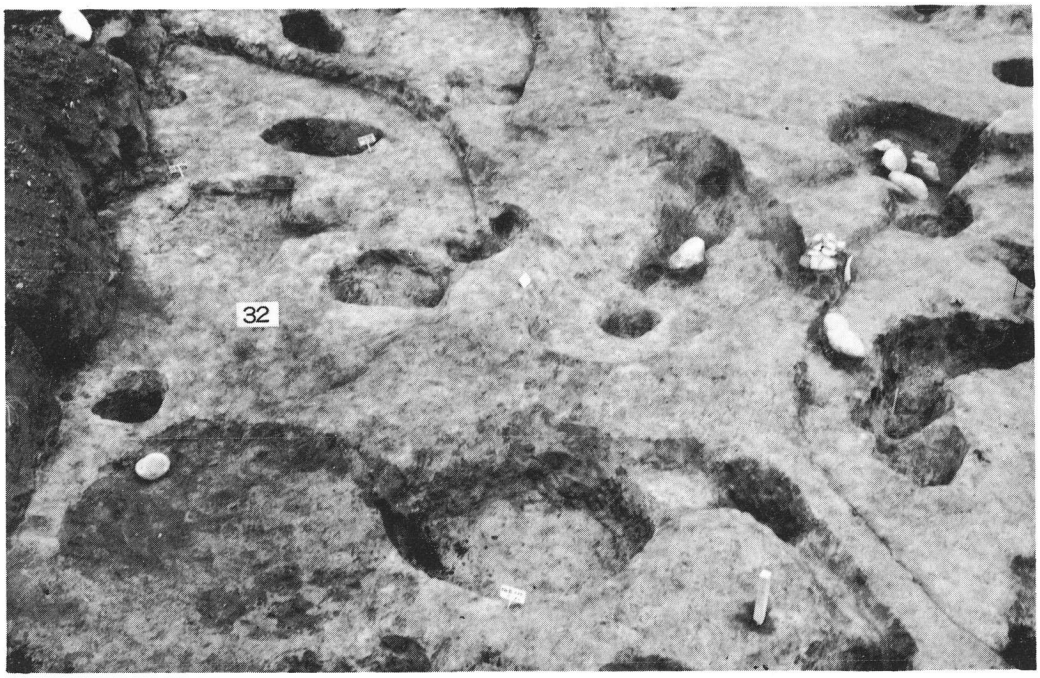


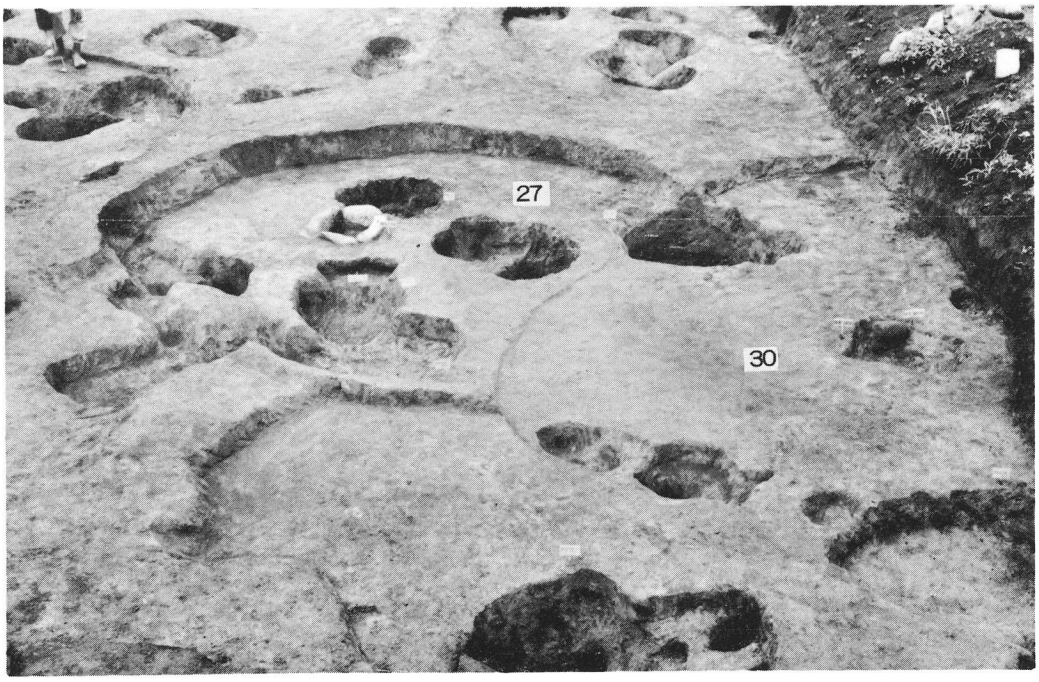
図版11　第23・24・26・29号(上)，第21・28・33号(下)住居址



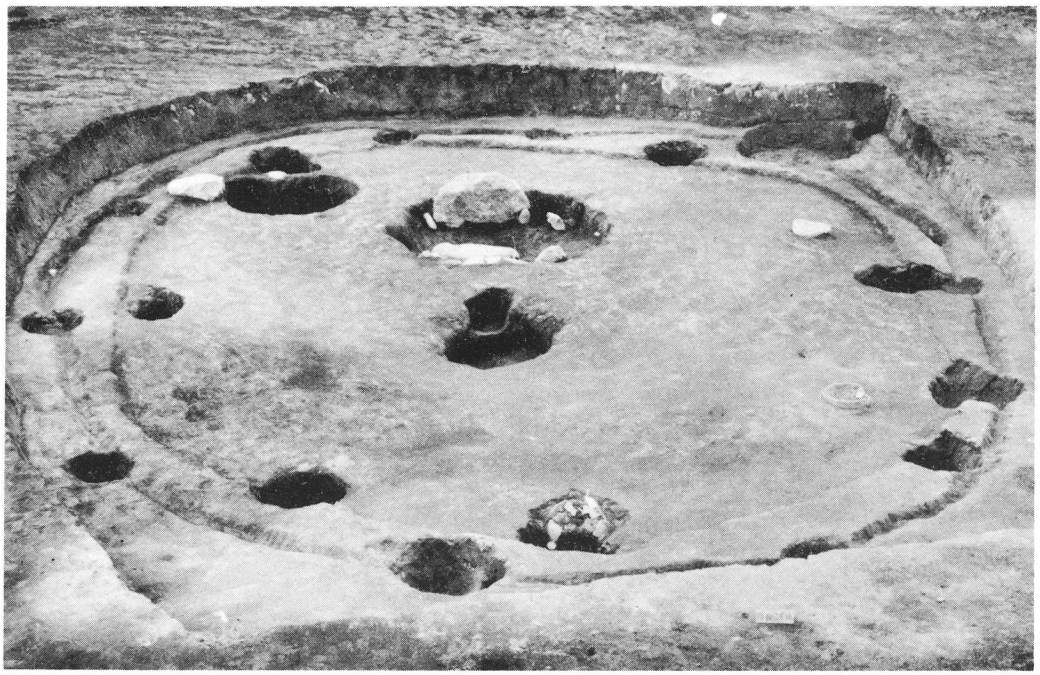


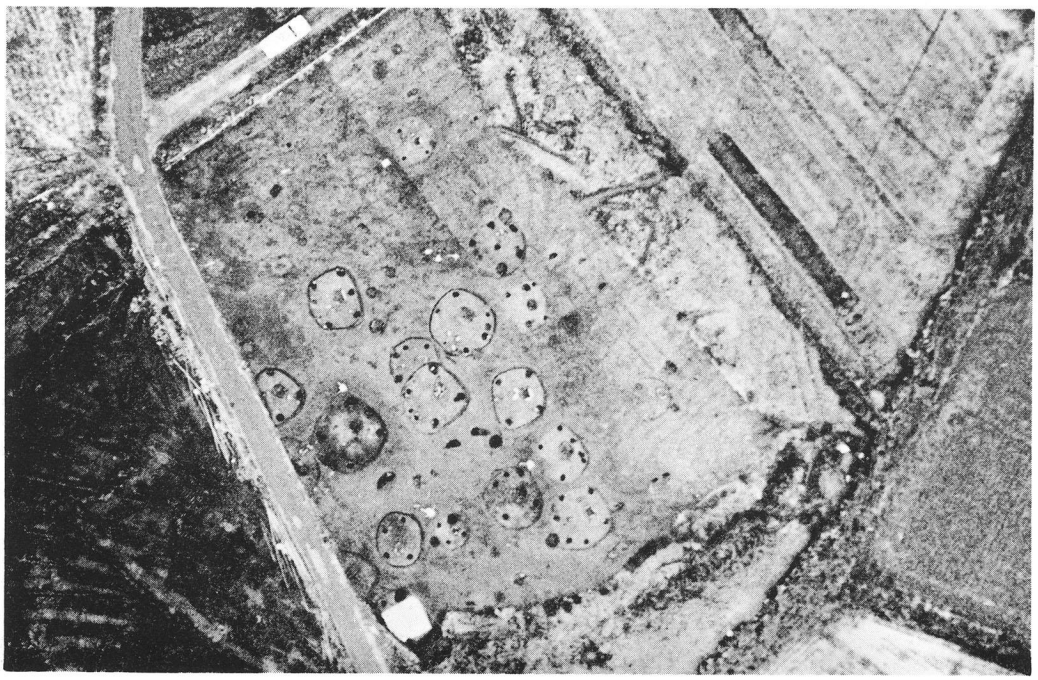
図版12　第32号(上)，第27・30号(下)住居址



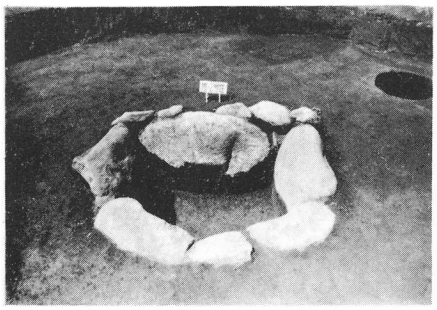


図版13　第25号住居址（上）・A地区航空写真

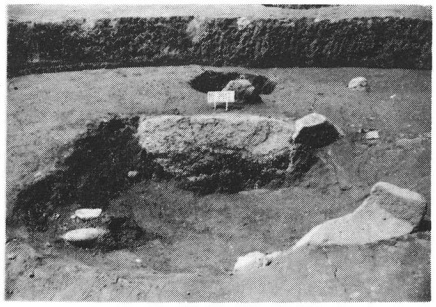




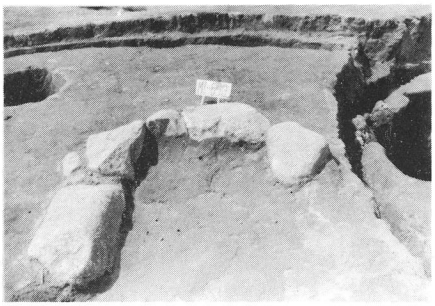
図版14　A地区組石炉



2

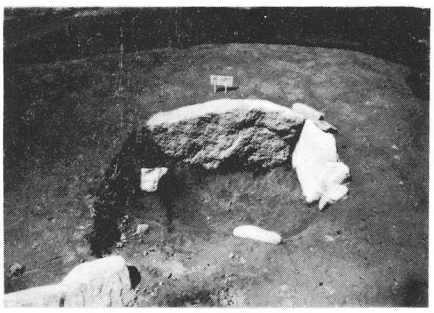


3

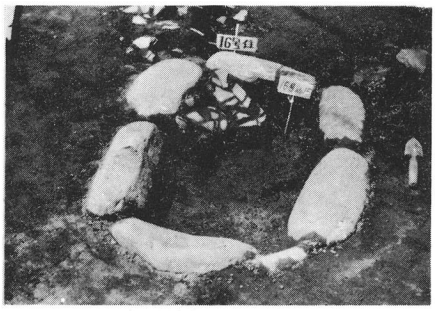


6

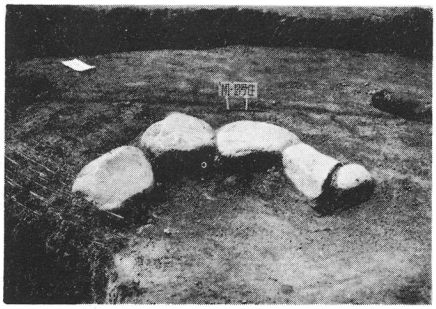
7



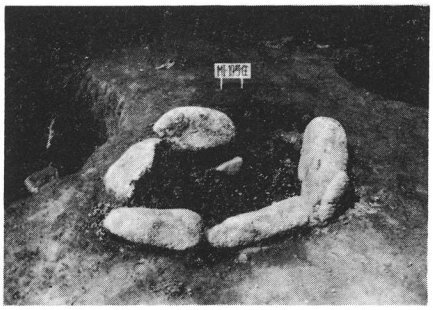
8



16

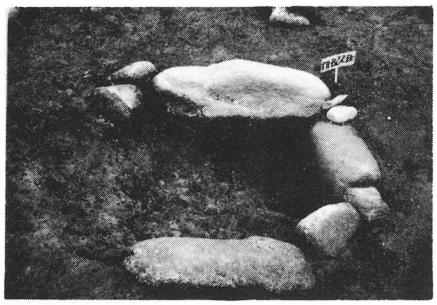


18

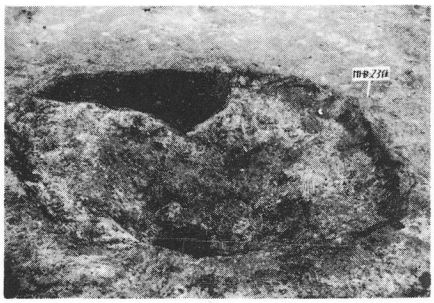


19

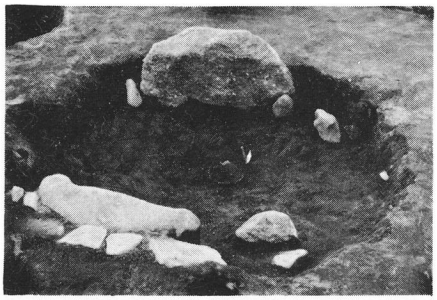
図版15　B地区組石炉



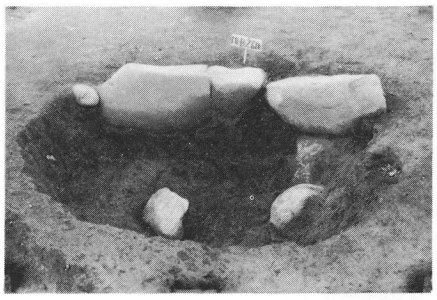
22



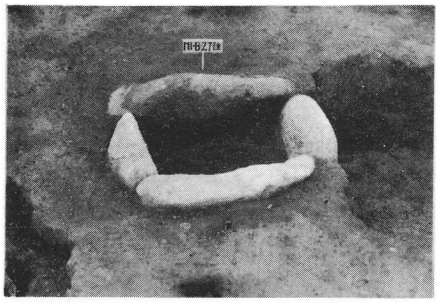
23



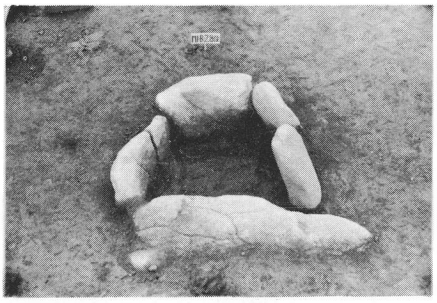
25



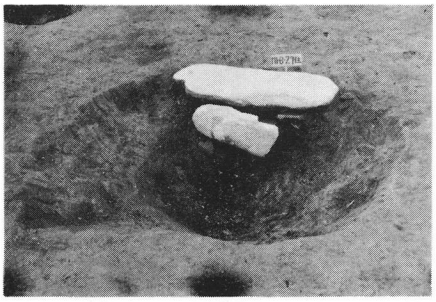
26



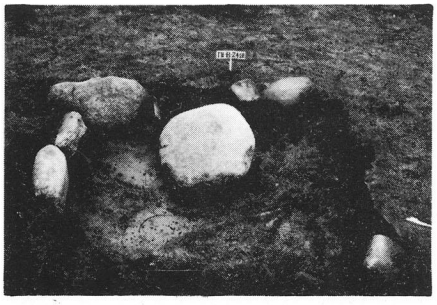
27



28

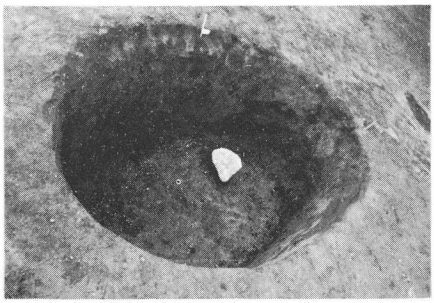


29

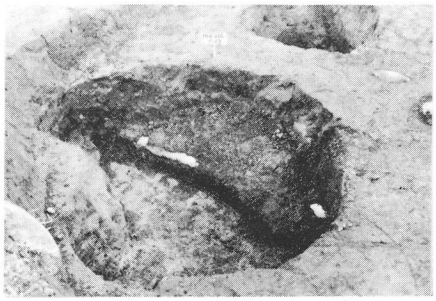


34

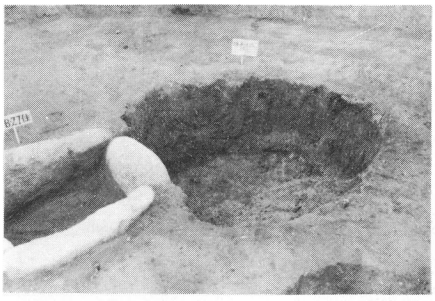
図版16　土壙溝状遺構・柱穴



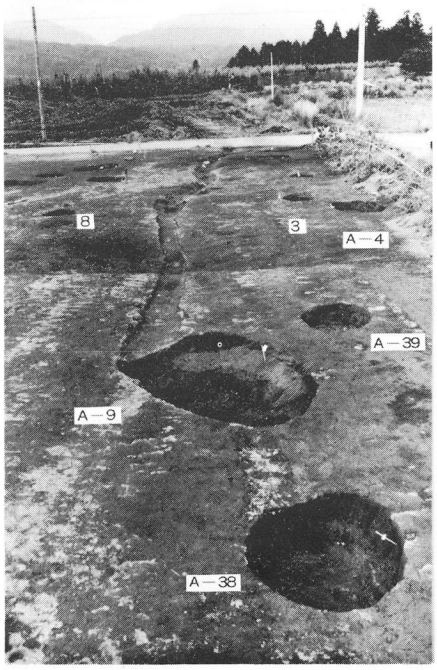
A－41



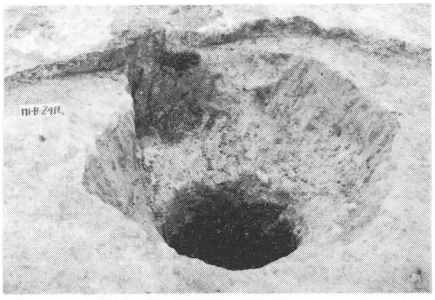
B－13



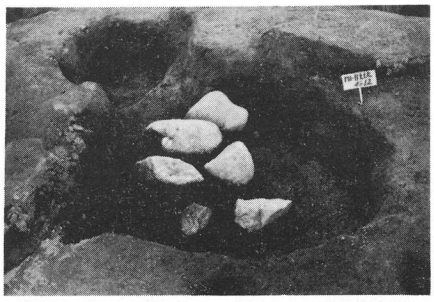
B－7



溝状遺構と土壙

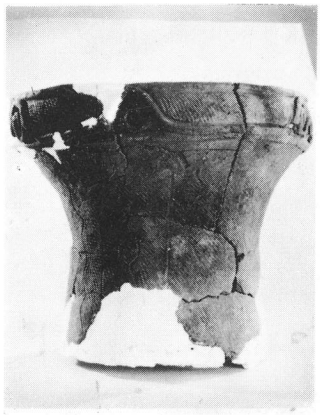


柱穴



B－12

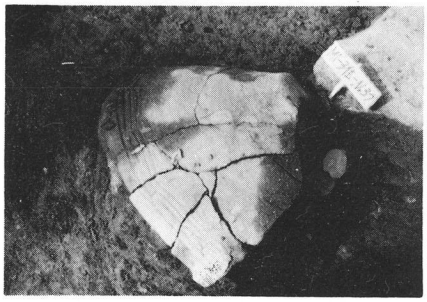
図版17　出土遺物Ⅰ

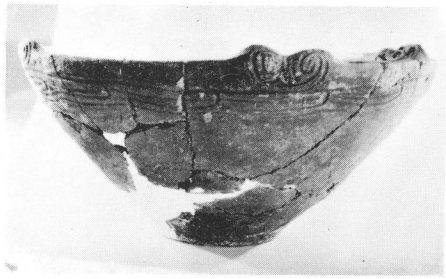


1号住覆土　1

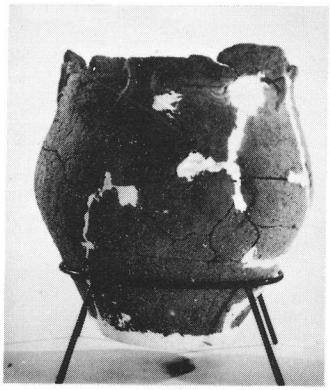
1号住覆土　2

1号住覆土　3

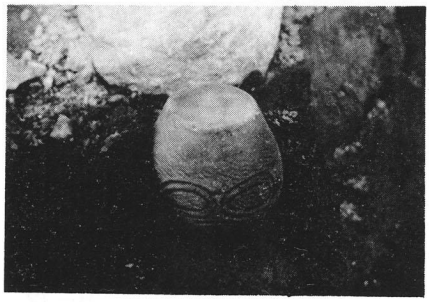




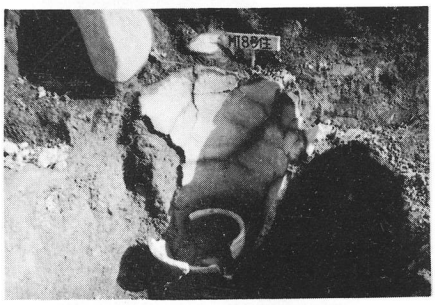
1号住覆土　4



3号住埋甕　5

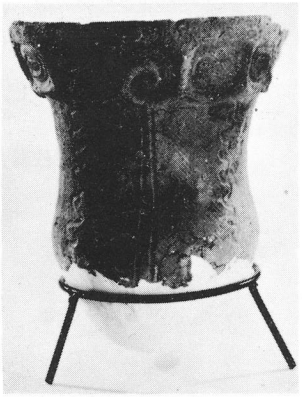


5号住覆土　6



同埋甕　10

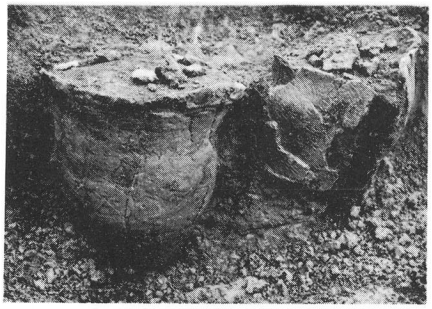
5号住埋甕　7



7号住伏甕　8

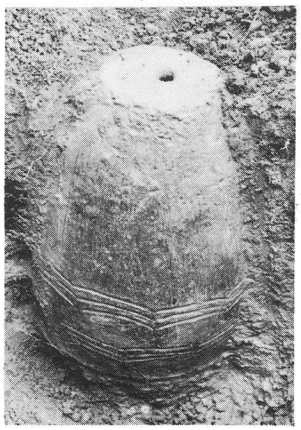
8号住埋甕　9

図版19　出土遺物Ⅲ



10号住器台　12

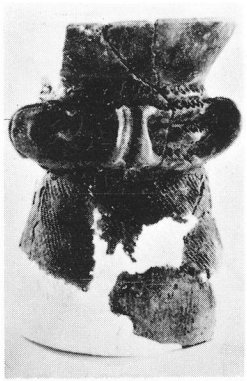
14号住器台　14



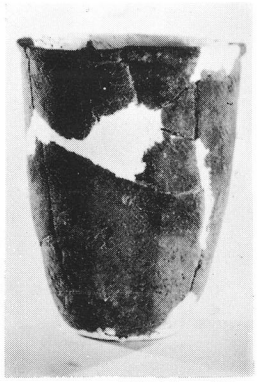
10号住埋甕　11

14号住覆土　13

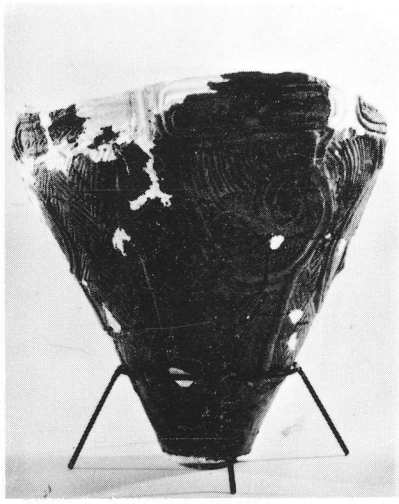
14号住伏甕　15



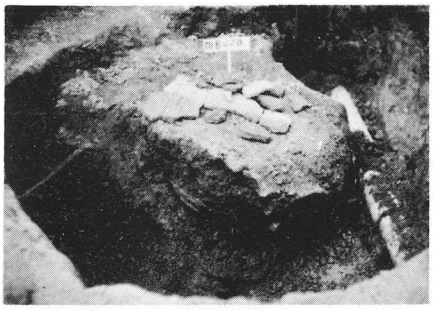
18号住覆土　16

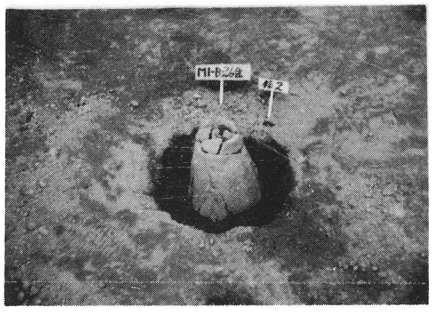


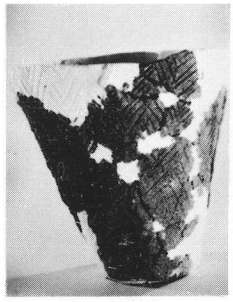
同覆土　17



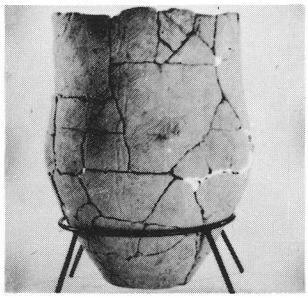
22号住埋甕　18







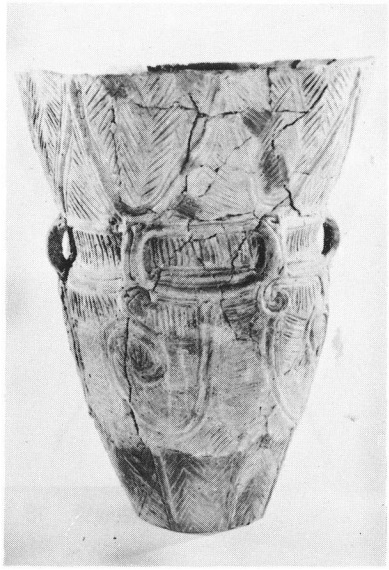
26号住伏甕　19



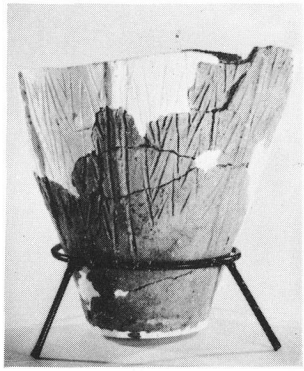
25号住埋甕　20

25号住覆土　21

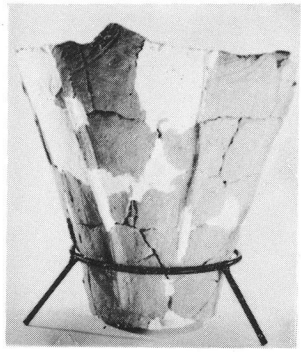
図版21　出土遺物Ⅴ



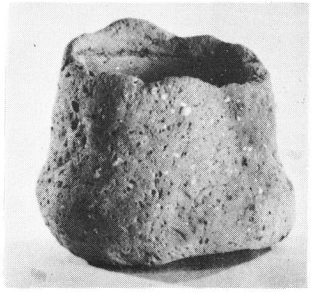
33号住埋甕　22



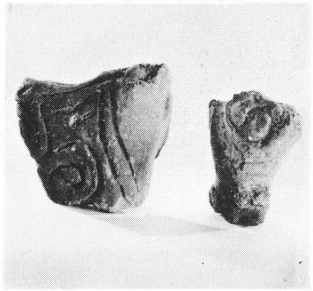
33号住覆土　23



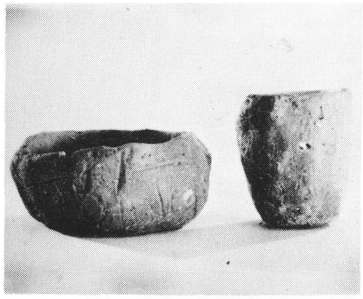
B地区覆土　24



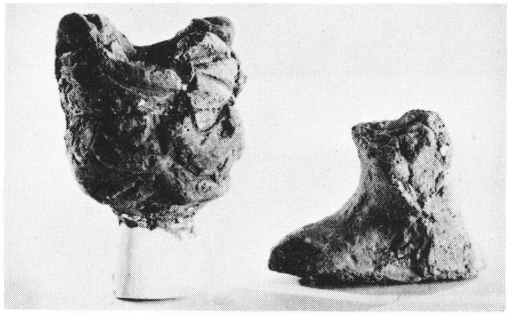
11号住覆土　26



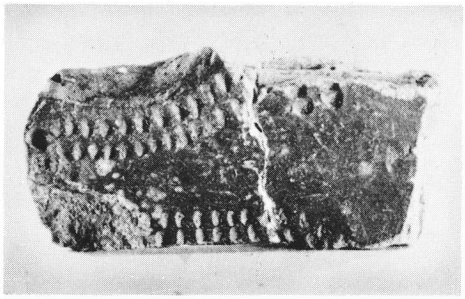
13号住覆土　27



10号住覆土　25



B地区覆土　29



A地区覆土　28

図版22　発掘スナップ

10住居址の調査

3号住居址のベルトを計る

村関係者視察

1号住居址の調査

3号住居址の調査

B地区発掘開始

B地区遺構の全様あらわれる

模型飛行機で航空撮影

ま　と　め

溝林遺跡の調査結果の詳細については前述のとおりであるが，調査及び整理を通して知り得た二・三の問題点を記してまとめとしたい。

溝林遺跡は国鉄七久保駅の東方約1㎞余，天竜川右岸段丘でも古い部分に当り，標高665～668ｍに所在する遺跡である。

1.遺跡附近地理的環境，遺跡の上方200ｍあたりには，湿地帯と湧水を利用して作った新田の堤があり，その堤から遺跡の北側は湿地帯で，その湿地の終りに横前の堤が作られている。南側は比高7～10ｍのゆるやかな段丘になっていて，古くは一部に湿地帯があった。遺跡附近には河川らしき河川は存しないが，水には恵まれている環境である。この溝林遺跡の所在する段丘上には，縄文中期末～縄文後期・弥生時代（水神平式）に併行する土器を出土する刈谷原遺跡等が分布している。

2.住居址についてみると，（A）住居址の形態は隋円形が一番多く全体の約50％を占める。円形・隅丸方形が約20％，他は切合が多く，形態不明のものが30％となっている。（B）住居の出入口が東南方向の住居は1・2・3・4・5・6・7・9・10・11・12・13・14・15・17・18・19・25 28・29の20軒で全体の約60％である。次に南の方向では8・22・23の3軒。南西では16住1軒，東向では30住1軒である。出入口の不明なのは切合と道路で調査できなかった住居址である。本遺跡では西と北の方向に出入口をもつ住居址は皆無であった。（C）住居址の規模，長軸が6ｍ以上5・7・10・13・29住の5軒，5～5.9ｍの住居址は1・3・6・8・12・15・22・24・25の9軒，4～4.9ｍでは2・4・9・11・16・27住の6軒，3～4ｍでは19住の1軒，他は切合と道路で調査できなかった住居址である。（D）柱穴，25号住居址の多柱穴を除けば，ほとんど4本柱である。このことは，集落の建物構造を考える上で重要な資料である。（E）炉址，本遺跡の炉址は大方石囲炉である。そのうち，炉石が完存していたのは2・16・19・28住の4住居址で，他の住居址はほとんど抜石されていた。今後炉址の抜石についての研究が望まれるところである。また，本遺跡の炉址の大きさを見ると，大型・中型・小型の三種類に区分することができる。そのうち，大型のものが約半数を占めている。炉の大型化は食物を調理し，暖をとり，明をとり，そして食事をしながら一家の楽しみの場となったことだろう。炉が住居内で定着することは家族単位での生活が確立し，安定した生活を意味するものであろう。（F）埋甕，A地区では1・2・5・8・10・11住，B地区では25号住に検出された。B地区では重複が多い個所があるので，この個所ではほとんど埋甕を認めることができなかった。A地区では三分の一の住居址に埋甕が出土しているところより，埋甕を持っている住居址と，持っていない住居址から，あるいは，家族単位を知る手掛りを得ることができる可能性もあり得る。また，埋甕の位置であるが，本遺跡では総べて入口の方向にあると言うことであることは，遺跡内での一定の規則制があったことを窺うことができるが，それがどの様な意味をもっているのかは，具体的にはむずかしい問題である。

（G）石畳，A地区5号住居址に検出された石畳であるが，住居址の北東の壁に接して10〜15㎝大の面が平の自然石15個を石畳風に1㎡程の広さに敷詰めてあるのが発見された。おそらく，祭祀的なものではなかろうか。溝林遺跡にあっては5号住居のみに認められたのであるが，5号住居址のおかれた社会的及び信仰な面を考えるとき，大変興味深い問題である。（H）木炭，10号住居址からは，多量の木炭が検出された。おそらく，火災にあった住居址であろう。障壁の保護を栗の割板で作ってあるのが検出されたことである。今までは極一部にこうした例は報告されているが，壁の半分に達する程の発見例は聞いていない。壁の保護について良好な資料といわなくてはならない。（I）土器型式からみた住居址。曽利I式に該当する土器は発見されたが，住居址はついに発見されなかった。曽利II式に比定される住居址は，A地区では1・2・3・16・19住の5住居址，B地区は25号住1住居址のみである。曽利III式比定される住居址はA地区では4・7・9の3住居址，B地区では29号住居址1軒，曽利II〜III式に比定されよう住居址は，A地区では5・6・8・10・11・13・15・17・18住の10住居址である。B地区では22・23・28・30住の4住居址である。曽利II〜III式に比定される遺物を出土する住居址は，出土した住居址総数の約半数に達しているということが確認された。従って，この時期に主に住居が造られたむきが窺われる。（J）溝林遺跡の集落について，結果的には南側に広場をもつ馬蹄形の集落であることが明らかとなった。今回は紙面の制約もあって以上の成果についての考え方を述べることができないので，ここでは希望を述べてまとめとしたい。長崎元広氏の言われるように，集落をめぐる自然環境と生業の問題，さらに墓，墓域や各種の石造遺構，また，小竪穴や土壙，貯蔵施設などと集落との統一的な把握という問題は半世紀にわたって着実に研究され，それなりの成果をあげつつあるが，今後は集落の研究から集落群への研究へ，それをさらに広げ「地域研究」にまでひろげて行き，縄文時代の社会と文化の構造をとらえる方向に研究を進めるようにしてゆきたいものである。

本調査に御協力を下さいました地元の方々，上伊那地方事務所，南信土地改良事務所，県教育委員会の皆様に心から感謝を申しあげる次第である。

調査団長　友野良一

溝林遺跡　長野県上伊那郡中川村片桐溝林遺跡

昭和56年３月

発行　中川村教育委員会
長野県上伊那郡中川村

印刷　株式会社 新葉社
長野県飯田市常盤町飯田商工会館内